

田辺聖子における〈戦後〉

——終戦後の樟蔭時代を中心に——

住友元美

はじめに田辺聖子におけるもうひとつの〈戦後〉

二〇〇七年六月に大阪樟蔭女子大学小阪キャンパス図書館内に田辺聖子文学館が開館して以降、作家田辺聖子が自らの樟蔭女子専門学校（現大阪樟蔭女子大学、以下「樟蔭女専」と略記する）在学中（以下「樟蔭時代」と記す）について語る機会が多い。一九二八年三月二十七日生まれの田辺聖子が戦時の特別措置¹⁾によって樟蔭女専に入学したのは、一九四四年四月、一六歳の誕生日を迎えて間もない時期であった。それから、一九四七年三月の卒業までの三年間、田辺聖子は樟蔭女専で学生時代を過ごしたのである。

二〇〇八年四月に開かれた田辺聖子文学館ジュニア文学賞記者発表

において、田辺聖子は樟蔭時代を振り返って、次のように述べている。

本当に、樟蔭女専はまだ、一年半が戦争中、一年半が平和になった、そういう様々な難しい時代でございましたけれども、戦争中にも関わりませず、この樟蔭学園に入ったときに、まあ学校全体に漲る自由の雰囲気、そして、女の子を女の子として正しく導いて下さると申しましようか、勉強したいっていう女の子にとつて、とっても優しい、夢のあふれた学園でございました。²⁾

また、ことに終戦後の一年半については、「本当に、国文学の勉強にひたっておりますた」³⁾、「夢中になって勉強いたしました」⁴⁾と回想

し、樟蔭の象徴とも言い得る緑の袴についても、「樟蔭は緑の袴で、みんなそれをはきたくて。やつと終戦、卒業までにまにあつて終戦後一年半、緑の袴をはけてよかった」と述べている。

かように、田辺聖子にとつての樟蔭時代が、一九四四年四月から一九四七年三月までの、日本の終戦Ⅱ敗戦によつて二分される三年間であることから、田辺聖子の樟蔭時代についての回想は、必然的に、田辺聖子における戦中・戦後についての語りともなつて表れることになつていく。そして近年の田辺聖子の発言は、ことに終戦後一年半の学生生活において、戦後の「平和」を謳歌したかのような印象を与えるものになつていく。

確かに、戦後になつて、空襲や勤労動員によつて授業が中断されることなく学生本来の生活を味わつことができるようになったことは、田辺聖子にとつて想像以上の喜びであつたに違いない。しかし、近年のかかる発言からは知ることのできない〈戦後〉が、田辺聖子には、ある。それは、田辺聖子のいわゆる自伝的作品のなかに見ることのできる、「軍国少女」であつた田辺聖子にとつての〈戦後〉である。

1 田辺聖子における〈戦後〉の意義

なぜ、田辺聖子の〈戦後〉に注目するのか。まず、この点について述べる必要がある。

作家として田辺聖子の名が全国的に知られるようになったのは、

「感傷旅行」(『航路』第七号(一九六三年八月))で第五〇回芥

川賞を受賞した一九六四年(田辺聖子三六歳)のことであつた。その受賞前後の取材において、田辺聖子は、「私は最初、小説は人が(あるいは自分が)幸福になるための処方箋と思つてかきはじめました。

「悪意」や「貧しさ」や「偏見」や「戦争」など、幸福を阻むものはいくつもあつて、書きたいテーマはたくさんある」と述べていた。

そしてまた、「戦中派からみた戦後派」が生涯の作品テーマとなるであろうことを述べ、「わたしら(戦中派―引用者)はつまり戦中の歪みに、いきなり戦後の虚空と、怒濤で、妙な加熱があつて却つてまだまだ妙なものが、私らの中には、いっぱい、うようよしてます」と語つていた。かつて「軍国少女」であつた田辺聖子は、戦後に自らを「戦中派」として意識するようになったのだ。そこで、書き伝えなければならぬと感じたのが、戦争や銃後経験と共に〈戦後〉であつた。

また、芥川賞受賞から約十年後に、田辺聖子が〈戦後〉について語つたものがある。それは、「あなたは『戦後』という言葉聞いてなにを思い、なにを感ずますか。また、あなたにとつて『戦後』は終つていますか。まだ終わりませんか。それぞれ、どんな理由からですか」との問いに答えたものである。ここでは、次のように語られている。

価値観念の逆転をまず思う。人間の生き方を例にとれば、国家

と個人が一致した時代が、一転して、全くかわりなく、国民としてではなく、個人として生きることになったことだ。

私には戦後は一生終わらない。一部の若い人を見るたびに、こんな人たちを育てるために、戦いで多くの生命が失われていったのだらうかと思う。右翼的、英雄待望論的な動きをみせる人たちだ。それでも私にとって戦後は終わらない。私の生きる道と、国とのかかわりに解答が出るまでは。⁽¹⁰⁾

ここで田辺聖子は、〈戦後〉をまず「価値観念の逆転」として認識している。そして、敗戦（終戦）によって断ち切られた国家と個人（「私」との関係)を新たに構築していく過程を〈戦後〉と捉えたのである。それは〈戦後〉を語ること、伝えることから始められ、数々の作品が生み出されることとなった。田辺作品のなかでいわゆる「ハイミスもの」と呼ばれる恋愛小説の女性主人公（主に三十代の仕事を持つ未婚女性）には、田辺聖子のやや上の年代の女性達——戦争によって結婚相手となるべき男性を失い、戦後、家族を支えるために働かなければならなかった女性達——の生き方が投影されていた。⁽¹¹⁾ また、「中年もの」と呼ばれる小説に登場する中年男女（夫婦）も、戦時中に少年・少女期を過ごし、戦後がむしやりに働いて中年の域に達した「戦中派」だ。⁽¹²⁾ そして、評伝小説や古典に関する作品についても、その原点に、田辺聖子の戦時および戦後の経験（記憶）との結びつきが指摘されている。⁽¹³⁾ かように、半世紀以上にも及ぶ田辺聖子の作家生活

において、〈戦後〉が作品のテーマであり続けたことは確かである。そして、その〈戦後〉を象徴するのが、「価値観念の逆転」であったのである。

では、この「価値観念の逆転」を、田辺聖子是如何に受けとめ、伝えてきたのであるか。本稿では、田辺聖子が「価値観念の逆転」に直面した自らの姿を如何に描いてきたのか、ことに自伝的作品において、〈戦後〉との出会いの時期ともなった戦後の樟蔭時代を如何なる時代として描いてきたかに注目し、田辺聖子にとっての〈戦後〉についてみていくことにしたい。

2 自伝的作品にみる〈戦後〉

田辺聖子には、数点の自伝的作品がある。単行本化されているものだけでも、終戦後二十年目に刊行された『私の大阪八景』（文芸春秋新社 一九六五年⁽¹⁴⁾、田辺聖子三七歳）、田辺聖子五〇歳前後に書かれた『欲しがりません勝つまでは 私の終戦まで』（ポプラ社 一九七七年⁽¹⁵⁾、同四九歳、以下、『欲しがりません』と略記）と『しんこ細工の猿や雉』（田辺聖子長篇全集¹⁸『文藝春秋 一九八一年、同五三歳、以下、『しんこ細工』と略記）、七〇歳のときに書かれた『楽天少女通ります 私の履歴書』（日本経済新聞社 一九九八年⁽¹⁷⁾、以下、『楽天少女』と略記）、そして、終戦後六十年目に刊行された『田辺写真館が見た『昭和』（文芸春秋 二〇〇五年⁽¹⁸⁾、同七七歳）があり、これ

らすべてが、終戦あるいは〈戦後〉に言及している。⁽¹⁹⁾

これらの自伝的作品は——田辺聖子自身の手元に残された膨大な少女時代からの資料に基づいて書かれたものではあるが⁽²⁰⁾、作家（田辺聖子自身によれば「物書き」作家）田辺聖子による自らの人生を題材にした作品であると言える。したがって、作品によって、終戦ならびに〈戦後〉に関する叙述にも若干の違いが見られる。

次に、これらの自伝的作品から、田辺聖子が如何に〈戦後〉——「価値観念の逆転」——を捉えていたのかをみることにしよう。

(1) 「玉島にて」

田辺聖子の自伝的作品のなかで最も早い段階に発表されたのは、『私の大阪八景』に収録された「民のカマド 私の大阪八景その一 福島界限」(『のおと』一九六一年二月)であるが、終戦直後について言及した作品として最初のものと言えるのは、「玉島にて」(『航路』第六号(一九六二年一月)⁽²¹⁾、同三四歳)であろう。これは、敗戦時に一七歳であった田辺聖子が、戦後に一七年間を生きて、ようやく念願であった作家として歩み始めた頃に書かれたものである。

この作品には、駆け出し作家の「節」が、雑誌連載中の小説の取材をするために、母親の郷里である玉島(岡山県)を訪れたときのこと(22)が書かれている。主人公「節」は田辺聖子自身であり、雑誌連載中の小説は、田辺聖子にとって初の連載小説である「花狩」を指している。⁽²³⁾

作中で「節」は、終戦直後のことを次のように回想している。

学校は再開されていたけれど、「青少年学徒二告グ」というような文部大臣の演説なんかの又売りばかりで、新日本建設などと、そんなコトバに傷つかないものがよるしくやればいいのだ、美しく死ぬことばかり教えられて来た十七の若者に、人道主義や民主主義の安手な解説が何をぬりかえようというのだろう、まじめでりぢぎな人間に、そんなお手軽な精神のクロスワードパズルができるはずないと、若い節は漠然としたにくしみでふくれあがりながら、源氏や近松のテキストにくだらな棒や丸をかきこんでいた。⁽²⁴⁾

この「学校」は、言うまでもなく、樟蔭女専のことである。樟蔭女専は、戦時の被災を免れていたため、戦後すみやかに授業を再開したようである。⁽²⁵⁾しかし、ここに授業再開を喜ぶ「節」の姿は見られない。ここに描かれているのは、「新日本建設」などの言葉に傷つき「漠然としたにくしみ」を感じる「節」の姿であり、にわかに耳辺に騒ぎ立てられるようになった「人道主義や民主主義の安手な解説」によつては容易に糊塗され得ない、「美しく死ぬことばかり教えられて来た十七の若者」の「精神」、そのやり場のなさが描かれているのである。

(2) 『私の大阪八景』

終戦からちょうど二十年後となる一九六五年に、田辺聖子にとつて三冊目の単行本として刊行されたのが『私の大阪八景』である。⁽²⁶⁾同書は、田辺聖子をモデルとする主人公「トキコ」が小学校六年生であった一九三九年から女専を卒業し就職した一九四七年までを描いた作品である。そのうち、「われら御植（鶴橋の闇市）」（初出『文学界』一九六五年九月）には、女専二年生の「トキコ」が終戦を迎えたとき（一九四五年）のことが書かれている。

八月一五日の玉音放送を聞いた「トキコ」は、その直後に日記をつけるが、「いくらでもあとからあとから書」くことができ、書き進むうちに「だんだん文語調に」なり、歌までつくる。⁽²⁸⁾翌一六日も日記を書き、「書いていると、力が出て、いくらでも書けた」という。さらにその翌日一七日に「トキコ」は学校（樟蔭女専）に行くのだが、そのときの様子は、次のようなものである。

十七日、学校へいく。軽拳妄動するな、という（校長の引用者）訓話がある。軽拳妄動とはどういふことをさすのか分らない。でも、何となく、意味は察せられる。…神国日本の最後の滅亡の日が一億玉砕でなく、全面降伏だったという、かるがるしさを考えると、日本人はみな軽拳して妄動したくなるのも、むりはなからう。

トキコは、校長の話をきいているうちに、二つうたを作った。

「かけまくもあやにかしこきすめらぎの

み傍にありと思えばうれしも

今はただすめらみことの示したまう

ゆくて目ざしてひたあゆみゆく」

昨日からどうして、こんなにスラスラ歌が出来るのだろうと
思った。中々うまいと思う。⁽²⁹⁾

ここに登場しているのは、当時樟蔭女専の校長であった伊賀駒吉郎である。「トキコ」はその校長の訓話を聞きながら歌をつくり、「昨日からどうして、こんなにスラスラ歌が出来るのだろう」と自問するのである。そして、この問いに答えるように、次の文章が続けられている。

東久邇内閣は「一億総ざんげ」というモットーを発明した。

戦時中には「一億一心」や「すすめ一億、火の玉だ」という標語がたくさんあった。一億は日本国民の総数である。戦争や空襲で、だいぶん欠けてるはずである。その一億だけ消さずにおいて、あとへ総ざんげをつけたらしい標語の作りかたが、トキコにはまたがらんどつ精神に思えた。どこで、何が消えていつてしまったのか分らないが、消えたものがある。それに、総ざんげと
いったって、何を国民がざんげしてよいのやら。その標語の口吻
のかるがるしさと「ざんげ」という言葉の重々しさがチグハグで

ある。トキコはその標語に、軽率妄動の精神をかんじてしまつ。それが、日記に、すらすらと社説みたいなことを書かせてしまつ。

むかしは、書いていることをすっかり信じていたけれど、いまはとでもふしぎ。すらすら書くわりに、ちつとも信じてない。歌だってぼこぼこ出来る。けど、怒りがないような気がする。⁽³¹⁾

ここで「トキコ」は、自分が書いた「スラスラ」と出来る「中々うまい」歌や「文語調」の「社説みたいな」日記の内容を、少しも信じておらず、感情も込められていないと感じている。敗戦後に掲げられた「一億総ざんげ」という標語に感じたのと同じ「からんどう精神」を自らの書いたものにも感じているのである。

また、「文明開化〈梅田新道〉」(書き下ろし『私の大阪八景』一九六五年一月)にも、戦後の樟蔭時代のこととして、「ある評論家の先生」による「デモクラシイについて、非常に有益、啓蒙的な演説」を聞いたことが次のように書かれている。

デモクラシイという言葉などはじめてきいたので、トキコはすっかりびっくりしてしまって、今までこんなことをちよつとでも言おうものなら、不敬罪でただちにひっぱられていたから誰もいわなかったのであるものの、しかもトキコはそういう思想があるということすら教えられず、そういう本さえも手にしたことが

なかった。戦争中、そんなたぐいの本をよくも人目につかぬように隠したものである。よくも、知っている人は誰一人口をとざして喋ってくれなかったものである。トキコはへんな所で感心した。…知らないのは少年少女ばかりではないか。オトナは何ひとつ教えてくれていなかった。知っているくせに。
「でも、くらしいノ本ヲ読マナケレバイケナイ。」
とトキコは手帳にかきとめた。⁽³²⁾

ここで「トキコ」が驚き感心しているのは、「デモクラシイ」思想の内容に対してよりも、むしろその言葉や思想の存在を「オトナ」が隠し通してきたということに対してであったと言える。

そしてまた、一九四六年の正月に新聞に掲載された「平和国家にふさわしく…心から楽しそうに笑っていらっしやる」天皇の写真をみて、「トキコ」は、「何かをどこかへ置き忘れて来たような、妙に手応えのない、がらんどうな気持ち」を感じるのである。⁽³³⁾ここでは、戦中に信じていたあらゆる物事に「がらんどう精神」(空虚さ)を感じる「トキコ」の姿が強調されているのである。

(3) 『欲しがりません勝つまでは』

次に、田辺聖子が五〇歳を前にして刊行した『欲しがりません』は、一人称で書かれた自伝的作品である。本書には、「私」が高等女学校二年生(一三歳、一九四一年)から女専二年生(一七歳、一九四

五年)で終戦を迎えるまでの約五年間が描かれている。

ここで、一七歳の「私」は、八月一五日にラジオの「重大放送」を聞いても未だ日本の「降伏」を信じかね、翌一六日の新聞を読んで天皇陛下が「国の焦土化をこれ以上見るに忍びない」とポツダム宣言を受諾したと知ると、「焦土になったって、かまわないやないか」、「一億の日本人がみな玉砕して死ぬ、こんな美しいことがあるうかと教えられて育ったのに、今になってこのへんで、と降参するとは何だ。それならはじめから戦争をしなればいいんだ」と思う⁽³⁴⁾。そして、敗戦によって掌を返したように変わっていく社会状況に翻弄される「私」の姿が次のように描かれるのである。

新聞やラジオが、昨日までは本土決戦をとなえて、いまにも会津の白虎隊の少年のように、一億さしちがえて死のうというような、激越な調子であったのが、いまは一転して、
「忍苦して国体を護持しよう」

ということになり、私たちには、前もって何も知らされていないから、おどろくばかりである。

何をみても(ほんまかいな)になってしまつ。私はそれでも日記にはスラスラとこうかいた。

「陛下は力足らずして自責の痛恨に胸をかむ臣氏をお責めあそばされず、

『帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉ジ非命ニ斃レタル者及ビソ

ノ遺族ニ想ヲ致セバ五内為ニ裂ク』

とまで仰せられるのである。この大み心のふかき、嗚呼また何をか言わん、今はただ父とも仰ぎまつる大君を頂いて日本民族一致団結、これからさき何十年かつづくであろう幾多いばらの道を、断乎とふみしめ、最後の光明を仰いでひたすら、つとめはげんでゆくのみである」

自分で書きながら(ほんまかいな)と書いている。ついに私は、自分自身にさえ(ほんまかいな)と思うようになった⁽³⁵⁾。

ここでも、前掲『私の大阪八景』と同様に、「スラスラと」日記を書く様子が描かれている。そして、『私の大阪八景』では「がらんどう精神」「ちつとも信じてない」と書かれていたものが、ここでは「(ほんまかいな)」という心の声として表現されているのである。この、「(ほんまかいな)」という言葉によって、あらゆるものに懷疑の目を向け、自ら(書いた日記)にまで疑問を抱くようになっていた「私」の姿が強調されているのである。

なお、この「(ほんまかいな)」という言葉は、のちに、長篇小説『おかあさん疲れたよ』(講談社 一九九二年⁽³⁶⁾)でも使用されている。これは、田辺聖子が、「私の〈昭和〉報告書⁽³⁷⁾」、「私が人生の大半を生きた〈昭和〉という時代に捧げる、鎮魂曲⁽³⁸⁾」と位置づける作品である。同作品で、主人公の「昭吾」——彼は、その名の通り、昭和五(一九三〇)年生まれで終戦時一五歳であったという設定であり、す

でに作中では六十代になっている——が、ともに戦火をくぐり抜けた同級生と語り合うなかで述べられたのが、次の台詞である。

〈第一、昨日まで本土決戦や玉砕やと叫んでいた新聞・ラジオ、一夜明けるとクラッと変わって、民主主義の解説やもんな。あない、いばつてた軍人や憲兵、教護連盟の先生、みな愛想ええ小市民になりよる。……あの恨みは深いなあ。ぼくのあれからの人生は何にでも、「ほんまかいな」と疑り深うなったことやな〉
 〈ワシは「フーン」やな〉と小堀 〈誰がそんな偉いことぶちあげても、「フーン!」という氣イがのかんな〉³⁹⁾

それは、「戦時中の反動で、人々の心にも昔の倫理観を憎悪し、貶める気持が強く」なり、「ことにも、「お国のため」とか「忠孝」という言葉に人々は唾を吐きかけ、靴でふみにじり、「自由」「人間らしく」「民主主義」「人民大衆」というコトバが光り輝く「眼も眩むばかりの転変の世」⁴⁰⁾に順応することのできなかった、当時一五歳の少年であった「昭吾」たちの言葉として書かれたものであった。そしてまたこれは、当時一七歳であった田辺聖子の言葉そのものでもあったのである。⁴¹⁾

再び、『欲しがりません』に戻ろう。
 あらゆるものに対して「ほんまかいな」という思いを抱くようになった「私」は、その後に続く過酷な戦後の生活のなかで、それまで

自らが依ってきた価値観を、次のように理解するようになっていく。

戦時中の私は、「生けるしるしあり」とは思わなくせに、強いてそう思おう、としていた。
 自分のほんとうのきもちに蓋をし、オモシをのせていた。
 これからは、ほんとうの気持ちを、さぐりあてる力をもたなければ。
 私はそんなことを、すこしずつ、考えるようになっていく。

天皇陛下に命を捧げることが幸福だ、とは本当に思っていなかったのだ。ただ、そう考えることが、美しく思われたからにすぎないのだ。……

それは天皇への忠義と国への忠誠である。それは沖縄の子供たちのように、自決するほろびの道である。彼らの教えたのは、まやかしの死の美学なのだ。

そんなことも考えるようになっていく。⁴²⁾

このように、今まで自分が信じてきたもの、美しいと教えられてきたものが「まやかし」であると気付いたとき、「私」は「ほんとうの気持ちを、さぐりあてる力をもたなければ」と考えるようになり、「やみくもに、(生きたい!)」⁴³⁾と思うのである。ここに描かれているのは、先述した「あなたにとつて戦後とは何か」⁴⁴⁾の言葉を借りて言えば、「価値観の逆転」のなかで「私の生きる道」を模索する一七歳

の「私」＝田辺聖子の姿であった。

(4) 『楽天少女通ります』

そして、田辺聖子七十歳の年に刊行されたのが『楽天少女』である。本書には、幼少期から執筆時（一九九七年）までのことが書かれており、内容にあわせて田辺聖子自身の写真が掲載されているのが特徴である。小説として書かれた前出の自伝的作品と較べるならば、自伝的エッセイあるいは履歴書のエッセイという形式のものである。また、『しんこ細工』執筆からおよそ二十年を経て書かれたものでもあり、これまでの作品——自伝的作品を含む——をさらに俯瞰する立場から書かれたものともみることができよう。

本書にも、上述してきた終戦直後の樟蔭時代のことが書かれている。まず、八月一五日の玉音放送（天皇の肉声）を聞いたとき、「私は、実在であつて実在でないような〈現人神〉の肉声を聞いてしまったことが、取り返しのつかないような痛恨であつた」と言い、「困つたことだ。すっかり、人生観がくつがえつてしまふ」と述べる。そして、伊賀校長の訓話については、次のように書かれている。

この終戦直後、私にとって印象的だつたことが二つある。一つは〈民主主義〉だ。八月十七日に登校すると、（この登校も大変だつた。戦災で交通網はずたずたに寸断されている）すぐ伊賀校

長先生のお話がある。私も、それを期待していた。学生としてどんな心構えでいたらいいのか、示唆を与えてほしいと思つた。

先生は軽拳妄動するな、といましめられる。

アメリカの条件を、日本は誠実に受け入れねばならない、損害賠償のために働かねばならぬだろうが、男も復員してくる、空襲ももうないのだ、おいおい食糧も増産できよう、日本の建設には女性の力も大いに必要となる、というお話であつた。先生の講話はそののちもしばしばあつた。進駐軍が日本全土に駐留してきるとき、不安と混乱が人々を襲つた。戦時中〈鬼畜米英〉と叩きこまれたからである。

このときもいち早く先生は米英人は鬼畜にあらず、とその文化、民族性情のあらましを語りつづけられるのであつた。デモクラシイという語がラジオで新聞で頻繁に聞かれ、私たち学生はそんな言葉と発想を初めて耳にした。民主主義というのは、私たち若い世代の発想には根柢からないことだつた。⁽⁴⁵⁾

伊賀校長の訓話で「軽拳妄動」という言葉が述べられていたことは、『私の大阪八景』や『欲しがりません』にも書かれていた通りである。伊賀校長の訓話について、『私の大阪八景』の「トキコ」は話を聞きながら歌をつくり、『欲しがりません』の「私」は「ほんまかいな」と思つ。⁽⁴⁶⁾これに対して、『楽天少女』では、次のように述べられている。

昨日まで米英撃滅を唱えていた人が、〈民が主人になる、これが民主主義の根本思想であります〉などとラジオで得々としゃべっている。(へーえ。そういう考え方があったとはねえ。……) 私は呆然として聞く。しかし伊賀校長先生の民主主義講釈は、右の軽薄な時勢便乗とはちがいが、じつくりと信用して聞かれた。先生は戦時中でこそ、明白あやふいに言挙げされなかつたけれども、古い昔から、自由主義・民主主義の精神について思いをひそめられており、一朝一夕に、にわか勉強なされたのではないことが、少女こじょのころにも感得された。私たち生徒は、伊賀先生を信じた⁽⁴⁷⁾。

確かに、田辺聖子の言うように、伊賀校長の民主主義講釈は、「軽薄な時勢便乗」のそれとは一線を画するものではなかつたかと思われ。伊賀校長は、終戦後の一九四六年三月三日に逝去しているが、その遺稿に若干の手を加えたものが、『デモクラシーと八何ソヤ』(樟蔭女子専門学校・樟蔭高等女学校一九四七年三月)として刊行されている。同書(遺稿)は、終戦後から伊賀が亡くなるまでの約半年間に本文のみならずタイトル・序文まで書き上げられていたようであり、戦後の「にわか勉強」によるものとは考えられない。

しかし、戦後に忽然と語り出されたという点において、伊賀校長の「民主主義講釈」も他のそれと同様であつた筈である。先述した『私

の大阪八景』や『欲しがりません』には、伊賀校長の訓話と「軽薄な時勢便乗」のそれとを区別する姿勢は見られなかつた。これに対して、『楽天少女』においては、少なくとも、伊賀の「民主主義講釈」を「信じた」——「価値観念の逆転」を肯定的に受け入れた——一七歳の田辺聖子が描かれているのである。そして、戦後の学園生活についても、「多少の違和感を抱きながら、…何より勉学が面白くて、学業に残された時間は一年半しかなかつたけれど卒業まで楽しく学んだ⁽⁴⁸⁾」と記され、田辺聖子の近年の回想との近似性がみられるようになるのである。

3 〈戦後〉をみる眼

以上のように、田辺聖子の自伝的作品をみると、戦後の樟蔭時代に経験した「価値観念の逆転」に対する見方に変化が生じていることがわかるであろう。それは、作品のスタイルや執筆時期の違いに起因するところが大きいと思われる。

この点をふまえて、あえてここで参照したい作品がある。それは、最近公開された樟蔭時代の田辺聖子の習作「十七のころ」⁽⁴⁹⁾である。これは自伝的作品の範疇に入るものではないが、戦後の樟蔭時代に書かれた数少ない作品のひとつであり、終戦直後における田辺聖子の「価値観念の逆転」に対する反応を読み取ることのできる資料であるので、ここに挙げることにしたい。

この作品には、一七歳の控えめな少女「泉」が、両親の庇護の下、無為に洋裁学校に通う自分の生き方に不満を抱き、自らの進むべき「真実の生活」が如何なるものであるのか見出せず悩む姿が描かれている。作中には、「泉」の心情を理解しえない世俗的な両親のほかに、戦後の民主化を謳歌するかのよう多忙な学生生活を送る友人「良子」⁽⁵⁾が登場し、両者は対照的な存在として描かれている。「泉」は、両親に反発しながらも、両親の準備した「平穩そのものの生活」から抜け出す勇氣を持ち得ず、煩悶する。また一方では、「良子」の生き方に憧れながらも、「良子も亦、さういふほどに、すばらしくはないんだ」「このひとは、…未だ、私のもとめる真実の生活にはふれておない」との思いを強くするのである。すなわちこの作品には、戦前（前世代）の価値観を象徴する両親と戦後の価値観を象徴する友人のいずれにも共感できず（また共感されず）、両者と異なる新たな価値観（「真実の生活」）を見出せずに苦しむ一七歳の少女の姿が描かれていると言えよう。

この「十七のころ」はあくまで創作小説である。しかし、自分と同世代の少女を主人公としたこの作品には、戦後の「価値観の逆転」のなかで自らの進むべき道に悩み、樟蔭時代の田辺聖子自身の姿が投影されていると見ることも可能であろう。⁽⁶⁾そして、この、煩悶・動揺し、模索する姿が、上述してきた自伝的作品のなかに様々なかたちで描かれていたと言えるのではないだろうか。終戦一七年後に書かれた「玉島にて」には、「人道主義や民主主義の安手な解説」に「漫然と

したにくしみ」を感じる「節」の姿が描かれ、二〇年後に書かれた『私の大阪八景』には、「トキ」⁽⁷⁾があらゆるものに「がらんど精神」を感じる様子が、三三年後の『欲しがりません』には、「私」が何に対しても（ほんまかいな）と懷疑する様子が描かれた。そして、戦後五十年以上を経て書かれた『楽天少女』には、樟蔭女專の伊賀校長の「民主主義講話」を「信じた」田辺聖子の姿が描かれていたのである。

かくしてみると、『欲しがりません』までの自伝的作品と『楽天少女』のあいだに判然とした違いが見られよう。それは、「価値観の逆転」として語られている「民主主義」に対する否定的態度と肯定的態度とのバランスの問題である。『欲しがりません』以前の作品も「民主主義」それ自体を否定するものではなかったが、少なくとも、戦後突如として表われた「民主主義の安手な解説」や「非常に有益、啓蒙的な演説」に憎しみや驚き、あるいは空虚感や懷疑という感情を覚える姿が描かれていた。これに対して、『楽天少女』には、「軽薄な時勢便乗」型の民主主義講話を「呆然と」聞く様子は描かれているが、むしろ、伊賀校長の民主主義講話を「信用して」聞く姿の方が強調されていた。前者が、「価値観の逆転」に対する憎悪・驚愕・懷疑といった感情を強調することによって、その「逆転」前後の懸隔、一少女が受けた衝撃の大きさを際立たせているのに対して、後者ではその姿勢が軟化していると言えよう。

これは、『楽天少女』が、小説ではなくエッセイとして書かれたも

のであること、そして、終戦から半世紀以上を経て書かれたものであることが関係しているのではないかと思われる。しかし、それは、単に時間だけの問題ではなく、作家として三十年以上の経験と二百冊以上の作品を生み出したのちに書かれたものであることの意味が大きい。

一九七三年に「あなたにとって戦後とは何か」と問われて、田辺聖子は、「私には戦後は一生終わらない」、「私の生きる道と、国とのかわりに解答が出るまでは」と答えていた。⁽⁵²⁾このとき田辺聖子は、「国家と個人」の新しい関係を築き上げることを「一生終わらない」課題として捉えていたと言えよう。それは、田辺聖子四五歳、「ハイミス」を主人公とする恋愛小説をさかんに書いていた頃のことである。それから四半世紀を経て、『楽天少女』は刊行されている。『楽天少女』刊行の三年前、戦後五十年となる一九九五年に、田辺聖子は紫綬褒章を受けているが、そのとき述べられたのは、次のような言葉であった。

終戦の日、十七歳の私は焼け跡に立ちました。あれから五十年。この褒章はお上からいただいたとは思いません。戦後、私たちの世代が築き上げてきた日本からいただいたのだと、受けとめていきます。⁽⁵³⁾

ここで田辺聖子は「戦後、私たちの世代が築き上げてきた日本」と

いう表現を用いている。これを以て、田辺聖子が「私の生きる道と、国とのかわり」について解答を出したとは言わない。しかし、戦後五十年を迎える「日本」を以て、戦後、「私たちの世代」（戦中派）が築き上げてきた」と自負できるようになっていたことは確かである。このとき、田辺聖子は、すでに、前掲の自伝的作品『私の大阪八景』『欲しがりません』『しんこ細工』を世に送り出し、さらに、「私の〈昭和〉報告書」⁽⁵⁴⁾、「私が人生の大半を生きた〈昭和〉という時代に捧げる、鎮魂曲」⁽⁵⁵⁾と位置づける『おかあさん疲れたよ』を上梓していた。「昭和」が終わり、終戦から半世紀を経て、田辺聖子の〈戦後〉に対する姿勢に若干の変化が生じていたと考えることも可能であろう。そして、二〇〇八年に田辺聖子は文化勲章を受章する。〈戦後〉を書き続けたその業績が、初の単行本『花狩』刊行（一九五八年）から五十年という節目の年に、評価されたのである。このとき田辺聖子は、幼少期に父親に褒められた記憶と重ねながら、「この度のお国から頂いた栄誉、まさに亡父の愛とほめ言葉を、人生の終わりちかく、再び浴びた心地です。ありがとうございます」⁽⁵⁶⁾と述べている。ここで田辺聖子は、「お国」あるいは「祖国」⁽⁵⁷⁾に亡き父の面影を重ねている。それは、田辺聖子の読書好きを褒め、可愛がってくれた父であり、一九四五年十二月、田辺聖子一七才のときに亡くなった最愛の父である。「はじめに」で言及した戦後の樟蔭時代の回想は、まさにこの頃に述べられたものである。

むずびにかえて 田辺聖子の〈戦後〉、そして

以上、〈戦後〉——それを象徴する「価値観念の逆転」——を、田辺聖子が自伝的作品において如何に描いてきたか概観してきた。そこから見えてきたものは、田辺聖子にとつて〈戦後〉とは、絶対的価値の喪失に始まり、自己と正対することを必然化した時代であり、憎悪や驚愕・懐疑・煩悶といった感情を以て迎えられた時代であつたといふことだ。それは、「平和」という概念では掬いきれない時代であつた。しかしながら、このことは、田辺聖子が〈戦後〉を書くうえにおいて「平和」の到来を歓迎する様を描いてこなかつたといふことではなく、まして田辺聖子自身が「平和」の到来に否定的であつたといふことでもない⁽⁵⁸⁾。ただその平和は、あくまで、田辺聖子が拘泥してきた「価値観念の逆転」と表裏一体の関係にあつてこそ成立し得たものであり、「価値観念の逆転」についての語りを重ねたうえでこそ語り得るものであつたといふことである。近年になって田辺聖子が語る戦後の「平和」の背景には、〈戦後〉を語り、書き伝えてきた田辺聖子の文学的蓄積があることを忘れてはならない。

そして、田辺聖子が、「戦後・昭和の語り部」として、「女性に対する先駆的な視線」を備えつつ「庶民の視点に立ち戦後をとらえ」、多くの読者にそれを伝えてきたことは、近年ようやく評価され始めたばかりである。また——ことに二〇一一年三月以降——、自らの戦争体験・〈戦後〉体験をもとに多くの作品を世に送り出してきた田辺聖子の言葉を求める声は大きい⁽⁶⁰⁾。かかる近年の動向を踏まえた、田辺文学

そして田辺聖子に対する新たな評価が求められている。

註

- (1) 田辺聖子が高等女学校（以下、高女と略記）に入学した一九四〇年四月の段階で高女は基本的に五年制であつたが、一九四一年一〇月には文部省（当時）から中等学校最高学年在学者に対する臨時措置（実質的な修業年限の短縮）の通達があり、さらに一九四三年一月に公布された「中等学校令」によつて修行年限は四年に短縮された。また一九四四年二月に出された「国民学校令等戦時特例」（勅令第八〇号）第六条によつて高女四年修了者に専門学校への入学資格が与えられたため（文部省『学制百年史 資料編』（一九七二年）参照）、田辺聖子も、高女四年修了時に樟蔭女専の入学試験を受験し、進学した。
- (2) 田辺聖子文学館ジュニア文学賞記者発表スピーチ（二〇〇八年四月一八日）。
- (3) 同前。
- (4) 文化勲章受章記者会見スピーチ（二〇〇八年一〇月二五日）。
- (5) 田辺聖子インタビュ「青春のころ」（『MORGEN』二〇〇八年七月七日）。
- (6) 本稿においては、日本の第二次世界大戦敗戦によつて戦争が終焉し、政治・思想・教育などあらゆる戦前の価値観・世界観の転換・撤廃と新たな価値観・世界観の定着が計られた一定の時代という意味で〈戦後〉と表記し、単なる時期を示すものとは区別する。
- (7) 「芥川賞を受賞して 田辺聖子」（『朝日新聞』一九六四年一月二三日）。
- (8) 「この人 第五十回芥川賞候補となつた田辺聖子さん」（『神戸新聞』一九六四年一月二二日）、「ニュースコープ 芥川賞を受けた田辺聖子さん」（『兵庫新聞』一九六四年一月二七日）など。

- (9) 『めん下さい』 第50回芥川賞受賞作家 田辺聖子さん(「婦人民主新聞」一九六四年二月三日)。なお、この記事では、田辺聖子が「大阪っ子」であることを誇張するあまり、田辺の発言が不自然な大阪弁で書かれている。
- (10) 「あなたにとって戦後とは何か」(『毎日新聞』一九七三年八月三日夕刊)。田辺聖子を含め十五名が回答している。
- (11) 菅聡子「戦争独身女性へのまなざし——(ハイ・ミス)もの背景にあるもの」(菅聡子編集『国文学解釈と鑑賞』別冊 田辺聖子 戦後文学への新視角) 二〇〇六年七月、以下『田辺聖子』と略記)、同「(女手)の叛逆者 田辺聖子論」(『田辺聖子全集 別巻1』集英社 二〇〇六年)のうち、おもに「六 女性へのまなざし——昭和を生きる」など参照。
- (12) 真鍋正宏「(中年男)の存在理由」(前掲『田辺聖子』)、前掲菅「(女手)の叛逆者」のうち、「四 中年世代への応援歌——人生の「戦友」たちへ」など参照。
- (13) 前掲菅「(女手)の叛逆者」、安田孝「田辺聖子の戦争と文学」(『神女大國文』第一九号(二〇〇八年三月))など参照。
- (14) 初出『のおと』第八号(一九六一年二月)「書き下ろし(一九六五年一月)。なお、本稿では岩波現代文庫版(二〇〇〇年)を参照。
- (15) 本稿では、新潮文庫版(一九八一年)を参照。
- (16) 初出『別冊文藝春秋』(一九七七年三月)七八年二月、本稿では、文春文庫版(一九八七年)を参照。
- (17) 初出『日本経済新聞』(一九九七年五月一日)三二日)に大幅加筆。
- (18) 初出『文藝春秋』(二〇〇三年一月)二〇〇四年一〇月)。
- (19) ただし、『しんこ細工』は主に樟蔭女専卒業後の〇L時代から文学修行時代について書かれたものであり、『田辺写真館が見た「昭和」』は戦後に関する言及は極めてわずかであるので、本稿では参照するに留める。なお、この他にも、エッセイやインタビューで終戦時および戦後の生活に言及したものが数多くある。
- (20) 『欲しがりません』や『楽天少女』には少女時代に書いた小説などの写真が掲載されており、『しんこ細工』には大阪文学学校時代以降の文学修行時代の資料が多数用いられている(「文庫版のためのあとがき——しんこ細工はまだ未完成」『しんこ細工』「三九三頁」参照)。
- (21) 前掲「文庫版のためのあとがき——しんこ細工はまだ未完成」「三九二—三九三頁」。
- (22) のち『感傷旅行』(文藝春秋新社 一九六四年)収録。本稿では、文藝春秋版(一九七五年)を参照。
- (23) 「花狩」は、『婦人生活』(一九五八年三月)二月号)連載、のち田辺聖子初の単行本『花狩』(東都書房 一九五八年)として刊行された。なお、『しんこ細工』「三六六頁」参照。
- (24) 前掲「玉島にて」(「一八八頁」)。
- (25) 「第一表 臨時教育調査票 文部省」(昭和二〇年一月二〇日、『女専重要書類 昭和一九—二二年度』(樟蔭学園資料)には、講義・実験及実習ともに実施「可能」と記されている。ただし、授業再開日は不明である)。
- (26) この『私の大阪八景』について、田辺聖子は次のように述べている。
- 戦中・戦後の人心の惑乱。世相の狼狽で奸佞なること。ことに戦後の狂騒。その時代の疾風に捲かれた、一少女の目から見た日本、——という構図が『私の大阪八景』である。…(「軍国少女」) だつた私を、自己批判したり擁護するのではなく、戦時中から二十年を経た私は、変貌する日本ともども、変貌しない自分の内なるものをも、愛するようになったのだ。
- そして、「尤も私の裡にあっては、戦後、日本の変貌した部分と、変貌できない固有文化をみつめるのが、私の文学活動の核の一つ、と思ったり、もしている」と自らの文学活動における(戦後)の捉え方にも言及している(「わが感傷的文学修行の日々 なぜだかいつもウキウキしていた」『田辺聖子全集1』解説(二〇〇四年)、のち田辺聖子「わ

- れにやさしき人多かりき わたしの文学人生」(集英社 二〇一一年「二四～二五頁」収録)。
- (27) 同書のラストシーンは、全国巡幸で大阪市を訪れた昭和天皇の姿を「トキコ」が沿道で見送るシーンである。昭和天皇の全国巡幸は一九四六年二月に始められ、大阪府行幸は翌一九四七年六月五～七日に行なわれた。
- (28) 前掲『私の大阪八景』「二〇五～二〇六頁」。なお、日記の内容については、後述する『欲しがりません』を参照。
- (29) 前掲『私の大阪八景』「二〇七頁」。
- (30) 前掲『私の大阪八景』「二〇九頁」。
- (31) 前掲『私の大阪八景』「二〇九～二一〇頁」。なお、「一億総ざんげ」というモットーは、東久邇宮稔彦首相(終戦後初の内閣)が一九四五年九月五日の施政方針演説で、「前線も銃後も、軍も官も民も総て、国民悉く」「総懺悔」すべきと述べたことに依るものである。
- (32) 前掲『私の大阪八景』「二一〇～二一一頁」。
- (33) 前掲『私の大阪八景』「二一七頁」。
- (34) 前掲『欲しがりません』「二三四～二四〇頁」。
- (35) 前掲『欲しがりません』「二四一～二四二頁」。なお、この前段部分には、八月一七日に学校で聞いた伊賀校長の訓話に対しても、「ほんまかいな」という思いがムクムクと湧いてくる」と書かれている。
- (36) 初出『讀賣新聞』一九九一年三月二日～九二年五月二四日(全四一八回)。ここでは、講談社文庫版(上下一九九五年)を参照。
- (37) 同書「あとがき」(下)「三五八頁」。
- (38) 「昭和」への鎮魂曲』田辺聖子全集21』解説(二〇〇五年)(のち、前掲『われにやさしき人多かりき』「三〇五頁」収録)。
- (39) 前掲『おかあさん疲れたよ』上「一七一～一七二頁」。
- (40) 以上、同前「一六九～一七一頁」。
- (41) 〈戦後〉の状況に対する途惑いと憤慨とも言えぬ感情については、エッセイ「変わり身」(『暮しの手帖』Ⅲ―一三(一九八八年四月)、の

- ち田辺聖子『乗り換えの多い旅』(『暮しの手帖』一九九二年)収録)においても、次のように述べられている。
- 何しろ、(終戦時十代の子供であった田辺聖子たちは引用者)戦前の皇国史観で教育された、カチンカチンの国粹主義者たちであつたのだ。天皇の人間宣言に衝撃を受け、陛下のために玉砕することはばかり考えていた小さな愛国者たちは、その時点で精神的支柱を失って転倒してしまった。
- 戦前のタブーが解体して、共産党が合法政党になり、思想言論統制が崩れ、それまで国禁だつた思想がどつと巷にあふれた。再び少年少女たちは転倒した。自由とか民主主義とか男女同権とかいう言葉が、燦然と空に光った。三たび転倒した。
- (42) 前掲『欲しがりません』「二五〇頁」。
- (43) 前掲『欲しがりません』「二五二頁」。
- (44) 前掲註10。
- (45) 前掲『楽天少女』「一〇七～一〇八頁」。
- (46) 前掲註35。
- (47) 前掲『楽天少女』「一一〇～一一一頁」。
- (48) 前掲『楽天少女』「一〇六頁」。なお、ここにある「違和感」とは、阪大空襲で生家を失つたことと敗戦によって「茫然自失して」いた「一〇五～一〇六頁」)田辺聖子が、空襲に遭うことなく「まるで戦争がないみたい」であつた樟蔭女専の雰囲気と「一〇二頁」)、戦争も終戦も、何一つ精神に影をおとさないような「お嬢さんであつた年上の学友たちに対して感じたものであつた。
- (49) 拙稿「資料紹介 田辺聖子「十七のころ」」、『樟蔭国文学』四九号(二〇一二年三月)参照。なお、「十七のころ」については、田辺聖子さん幻の「習作」(『讀賣新聞』関西版 二〇一二年三月二五日)、「田辺文学の原点 学生時代の短編原稿」(『朝日新聞』二〇一二年四月一日夕刊)、「テンポよい大阪弁」『田辺文学』の片鱗」(『産経新

- 聞『二〇一二年五月三日』も参照されたい。
- (50) 作中で、「良子」は、親元から離れて「女医専」(大阪女子高等医学専門学校)に通いながら、「マルキシズムの解説講座」や「在外父兄救出学生同盟」の活動に参加するなど、多忙な学生生活を送る活発な人物として描かれている。
- (51) これは、のちに、「これからは、ほんとうの気持ちを、さぐりあてる力をもたなければ」(前掲註43)という心の声として表現されるものに繋がっていく。
- (52) 前掲註10。
- (53) 『産経新聞』一九九五年四月二八日夕刊。
- (54) 前掲註37。
- (55) 前掲註38。
- (56) 「田辺聖子さん あいさつ」(田辺聖子文学館HP〈新着情報〉「2008.10.28 田辺聖子さん 文化勲章受章について」)。なお、同直筆原稿が田辺聖子文学館に展示・保管されている。
- (57) 同前。
- (58) たとえば、前掲『私の大阪八景』「二三七〜三三八頁」など。
- (59) 菅聡子「研究動向 田辺聖子」(『昭和文学研究』第五二集〈二〇〇六年三月〉)。その後、前掲『田辺聖子』、前掲『ユリイカ』等が出た。
- (50) 東日本大震災後にはインタビュー記事等が婦人雑誌を中心に多く掲載された。たとえば、「ピバ・ストーリーVOL.2」『非常事態』だからこそ、人生に必要なものを見つめるとき 先輩たちの、「折れない情熱」 田辺聖子さん」(『SPUR』二〇一一年八月号)。また、林真理子が「元気になれる1冊」として田辺聖子『花狩』を推薦し(『週刊文春』二〇一一年五月五・一二日号)、田辺聖子『一生、女の子』(講談社二〇一一年五月)の帯には、「恋も仕事も戦争も阪神大震災も乗り切った聖子センセイ。私たちを奮い立たせる愛と勇気の言葉がここに!」と書かれている。